

薬のチェックとファクトのチェック

SNSの普及で二セ情報対策としてファクトチェックの重要性がよく語られるようになってきた。医療分野では、いわゆる新型コロナ用の「SARS-CoV-2 ワクチン」などワクチンの害に関する情報が二セ情報扱いされ、ファクトチェックの重要性がしきりと強調されてきた。

明らかな二セ情報でも人はしばしば騙される。まして、明らかな二セでなく事実だが、意図をもって都合のよい事実を切り取り、都合の悪い事実を無視した偏った情報・誤情報は、人々を間違った方向に誘導する。国がこうした誤情報を意図的に提供して政策を決定すると、その悪影響は計り知れない。

本誌は、「薬のチェックは命のチェック」の創刊以来、製薬企業の利益ではなく、人々の利益を重視し、目先の利益よりも健康で長寿を目指し、既存の科学の誤りをも正しつつ徹底的に事実に基づく偏りのない情報づくりを追求している。そのなかで、HPV ワクチンや SARS-CoV-2 ワクチンの害を指摘してきた。その立場からすると、国や専門家などが「ファクトチェック」のための「ファクト」としている内容も、本誌の重要な検討対象である。

今号の総説「高齢者の安全な薬物療法ガイドライン批判」で指摘したように、このガイドラインの問題点の元凶は、各種診療ガイドラインが発信する意図的ですからある「誤情報」だ。

New Products では、高齢者向け肺炎球菌ワクチンは、軽い肺炎は減らすが総死亡は増えると結論した。だが、国の甘い検討と意図的ともいふべき「誤情報」により、対象高齢者の半数近くが接種することにつながっている。

本誌 HP の「番外編」では、乳児の重症感染予防と称して妊婦に接種する RS ウイルスワクチンを取り上げた。利益よりも、母体や乳児の重篤な害があるかに上回るにも関わらず、害を見逃す国の「誤情報」で、2026年4月から公費により定期接種とすることが決まった。公費負担による定期接種が普及して大部分の妊婦が接種することになれば、最大で1万組の母児のいずれかに重篤な害が生じかねないことが、今回の検討で分かった。

「誤情報」が溢れるこのような現状を少しでも変えるために、今後とも徹底した科学的根拠(ファクト)に基づき、偏りがなく、利益相反のない、「命のチェック」のために健康に「嬉しい、優しい」「薬のチェック」情報の提供を目指すことを2026年の始まりにあたって再確認する。